



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3206号 2016.8.23 発行

**東京五輪に向けた機運醸成 オペラ上演など19件を選定** 産経新聞 2016年8月23日  
丸川珠代五輪相は22日に記者会見し、日本文化を通じて2020年東京五輪・パラリンピックの成功に向けた機運を盛り上げる企画に資金援助するプロジェクトの2次公募で、東日本大震災の被災地でのオリジナルのオペラ作品上演や、漫画を通じた障害者スポーツの魅力発信など計19件を採用したと発表した。応募総数309件。

丸川氏は「伝統文化から現代アート、ファッションまで多様な分野から選ばれた。2020年大会への機運が高まることを心から期待している」と述べた。

採用された企画のうち、被災地の岩手、宮城、福島各県では今年10月～11月上旬にかけオペラを声楽と語りで凝縮した形式のオリジナル作品を上演。五輪開催に向け復興をアピールし、国内外からの観光客の増加にもつなげる。人気漫画家の高橋陽一さんや浦沢直樹さんらも参加しての障害者スポーツ漫画の創作、最新のバリアフリー技術を生かした視覚・聴覚障害者向けの映画鑑賞会も選ばれた。

審査は五輪メダリストの朝原宣治氏や放送作家の小山薫堂氏ら8人で実施。政府は1件当たり上限1千万円を援助する。7月の1次公募では日本相撲協会による交流イベント「大相撲 beyond 2020 場所」など8件が選ばれた。

### 足らぬ民生委員、苦肉のOB再任 各地で欠員 8割が60～70代

日本経済新聞 2016年8月22日  
民生委員のインターンシップでは大学生が福祉関連の会議に参加（12日、大阪府豊中市）

地域住民のくらしを見守る民生委員のなり手が不足している。基となる制度が始まってから来年で100年を迎えるが、自治会などの加入率が低い地域を中心に、不足は深刻だ。高齢者の見守り、子どもの貧困など民生委員が必要とされる場面は増えるばかり。地域福祉を支える、次の担い手をどう確保するか、取り組みを追った。



「満遍なく活動したいが、自分が暮らす地区以外はなかなか……」と話すのは、東京都多摩市で民生委員を12年間務める高野弘美さん（70）。担当地区に加え、隣接する2地区でなり手がおらず、兼任する。

高野さんの担当地区は高齢化が進む。階段しかない集合住宅で重たそうに買い物袋を持つ高齢者を見かけたら、代わりに運ぶ。一人暮らしの高齢者の様子を心配して、夜に様子を確認しに行くこともある。

3地区合わせて2400以上の世帯を見守る。厚生労働省の配置基準では多摩市のような人口10万人以上の市の場合、1人が担当する世帯数の目安は多くても360世帯まで。高野さん1人で約7人分の負担だ。「自分が住む地区だけなら、買い物やゴミの状況で高齢者の様

子を把握できるが、兼任する地区では細かく目が届かない」と嘆く。

民生委員は民生委員法に基づき、厚労省から委嘱された特別職の地方公務員。1917年に岡山県で始まった「済世顧問制度」が現行制度の始まりとされ、来年は100周年。かつては地域の名誉職だったが、2000年の法改正で給与の発生しないボランティアとして位置づけられた。

高齢者や障害者の見守りに加え、児童福祉法により児童委員も兼ね、子育て世帯の相談や支援もする。全国に約23万人おり、市区町村が定めた地区ごとに1人推薦される。3年間を1期として、全国で一斉改選する。今年12月に改選を控えるが、高齢者やひとり親世帯など支援すべき対象が増える一方、民生委員の定数はほぼ横ばいだ。

多摩市では3年前の改選時に、全112地区のうち27地区で欠員が出た。満たした地区の割合は、

全国平均の約97%に対して約76%。今年12月の改選では後任の見通しの立たない地区が28に上る。同市担当者は「共働き家庭が増え、地域に根ざした活動経験のあるなり手の候補は今後さらに減るだろう」と話す。

一度でも欠員が出た地区では次の担い手探しへの働きかけが弱まり、不在状態が慢性的になりがち。隣接する地区の民生委員の負担が増え、困りごとの発見や解決のための関係機関との連携など、必要な支援の遅れが懸念される。

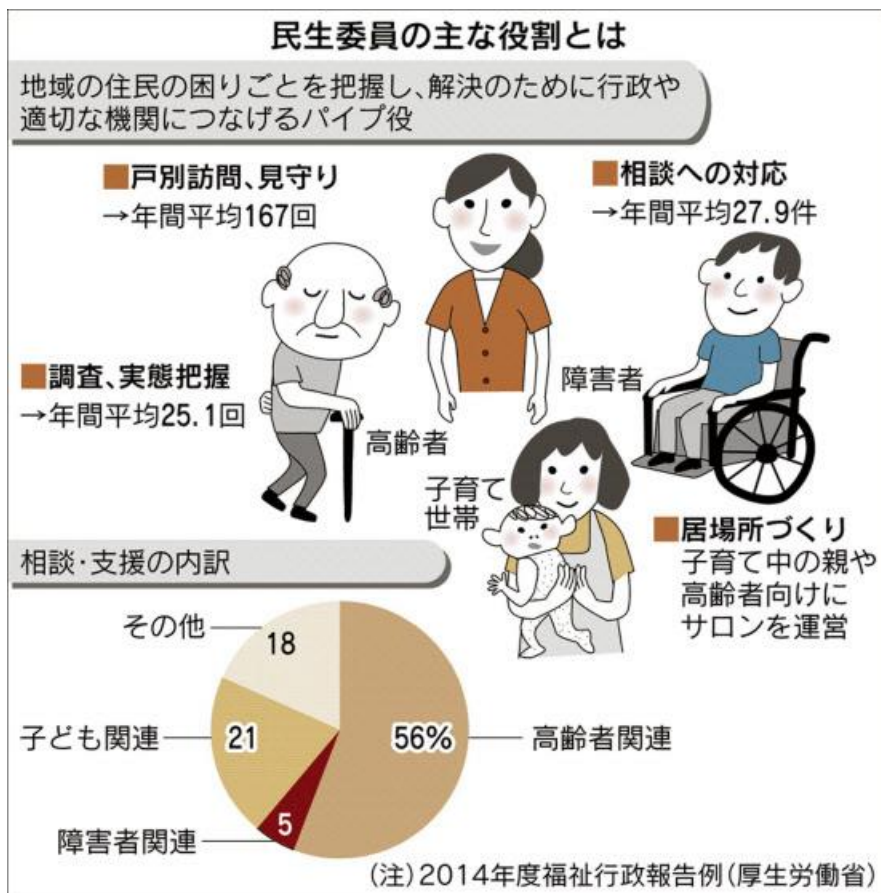
民生委員の全国組織、全国民生委員児童委員連合会（全民児連）の調査によると、12年時点で60～70代の割合が8割を超える。市区町村の協議会の約7割が課題として挙げたのはなり手不足だ。特に市区部で多く、世代交代が進まないという回答も多かった。

充足のため「定年」を超えた経験者の再活用も広がる。厚労省の選任要領では望ましい年齢を75歳未満とするが、地域の実情を踏まえた弾力的な運用を認めている。一方で全民児連によると、14年時点で上限年齢が76歳以上の市区町村は5.5%にとどまる。

佐賀県では10年の改選から75歳以上でも1期に限り再任を認めた。欠員の出たエリアから75歳以上でも適任なら推薦したいとの意向を受けて条件を緩和した。堺市も今年12月の改選から同様に再任を認めた。「まだまだ元気な経験者にはお願いしたい」（担当者）

なり手不足の原因として民生委員の認知度の低さも挙げられる。このため、活動を知ってもらおうとの取り組みも始まった。

大阪府は8月から民生委員のインターンシップを開催し、3大学から24人の学生を受け入れる。学生は戸別訪問や居場所となるサロンの運営など、地域福祉の現状を学び、活動



をSNSなどで発信する。

参加者の大阪府立大の杉本安里紗さん(19)は「授業では学べない、福祉の現場でしかわからないことを吸収したい」と語る。「活動内容を知る人ほど、なってもいいというデータもある」(府の担当者)。「若者ならではの発信手法で幅広い世代に認知を広げ、将来の担い手の育成につなげたい」と期待する。

個人情報扱わない範囲で民生委員の活動を支える協力員制度を独自に導入する自治体もある。全民児連の調査では8.5%の市区町村が制度を設ける。ただ業務の線引きが曖昧になり、協力員が集まらず、高齢なOB・OGの再活用にとどまる例も多い。

兵庫県芦屋市では、社会福祉協議会の福祉推進委員が協力員としても活動する。基本的に1地区に2人がつき、民生委員と合わせて3人で見守る体制を築いている。協力員を務めた経験から、後任として推薦される人も多く、3年前の改選時には100%と高い充足率につながっている。

厚労省の「民生委員・児童委員の活動環境の整備に関する検討会」の座長を務めた同志社大の上野谷加代子教授は「現代の暮らし方に応じた仕組みが必要。専業主婦や退職者が平日の日中、平日働く勤め人が土日や夜に対応すれば負担を軽減し、円滑に世代交代できる」と話す。(小柳優太)

#### 潜在介護福祉士の復職支援 県と神戸市が講習へ

神戸新聞 2016年8月23日

現場を離れている介護人材の復職を後押しする「介護職再就職支援講習」が9月から来年2月まで、神戸、西宮、姫路の3会場で開かれる。実技面を中心に講習する。

資格がありながら介護・福祉現場で働いていない「潜在介護福祉士」は全国的に約4割といわれる。兵庫県と神戸市の共同事業で、委託を受けた介護労働安定センター兵庫支所が行う。

各会場とも3日間の日程。体位変換や衣服の着脱、排せつ介助などの介護技術を実習する。

ヘルパー2級など介護福祉士以外の資格を持っている人も対象で、1回ずつの受講も可能。定員各回30人程度。テキスト代・受講料は無料。介護労働安定センター兵庫支所TEL078・242・5321(若林幹夫)

各会場と日程は次の通り。

【神戸会場】神戸市立こうべ市民福祉交流センター(神戸市中央区磯上通3)＝9月2、8、16日午後1時半～4時半

【西宮会場】西宮市民会館(西宮市六湛寺町)＝11月17日、12月14、19日午後1～4時

【姫路会場】ハローワーク姫路(姫路市北条)＝2月21、23、27日午後1～4時

#### 高齢者支援や農産物流通促進で連携 横浜市と佐川急便

日本経済新聞 2016年8月23日

横浜市は22日、高齢者・障害者支援や市の農畜産物の流通促進などについて、佐川急便と包括連携協定を結んだ。今後、それぞれが持つ資源やノウハウを活用。地域の社会的課題解決のために相互で取り組んでいく。

高齢者支援では、同社が社員向けの「認知症サポーター養成講座」を継続的に開催。定期的に巡回し、地域に精通している宅配ドライバーらに認知症への正しい理解をもってもらうことで、見守り活動をサポートする。障害者支援は特別支援学校などと連携。市内の営業所で職業体験実習を受け入れることで、就労機会の拡大を図る。

担い手の高齢化が進む農業分野では、身体的な負担が大きいとされている市場出荷までの過程を、より効率的・低コストでできるようにする輸送スキームを検討する。

協定はこのほか、地域防災、子ども・青少年の育成、環境保全推進、観光情報の発信、地域社会の活性化・市民サービス向上——の7分野で結んだ。横浜市によると、こうした包括連携協定を運輸業者と結ぶのは初めて。

同日記者会見した林文子市長は「佐川急便は市内をきめ細かく網羅したネットワークを持つ。包括連携を市民サービスの向上に役立てていきたい」と話した。

### 【相模原殺傷事件】市民生委員協議会長が偏見の助長を懸念



福祉新聞 2016年08月22日 編集部  
山に囲まれた津久井やまゆり園（1日）

神奈川県立の障害者支援施設「津久井やまゆり園」（相模原市緑区）で起きた殺傷事件が与えた影響は大きく、相模原市では3日、民生・児童委員協議会が市内の地区会長会を開き、民生・児童委員としての今後の活動方針を確認した。障害者があるのままでいることを阻害されないよう地域福祉活動に励むこととした。

6日には、脳性まひがあり、小児科医でもある熊谷晋一郎・東京大先端科学技術研究センター准教授ら有志の呼び掛けで事件の犠牲者を追悼する集会が都内で開かれ、障害者や福祉施設職員ら約200人が参加した。

集会は「議論する場ではない」と前置きされて医師、研究者、障害者の家族などさまざまな立場の人が参加し、事件の感想を述べた。国内外から400通超のメッセージが寄せられ、会場で一部が披露された。原裕子・同市民生・児童委員協議会長、熊谷准教授の談話は次の通り。

#### 偏見の助長を懸念 相模原市民生委員・児童委員協議会長 原裕子

今回の凄惨な事件には心を痛めているが、県外の民生・児童委員の会長様からもお氣遣いの言葉を頂戴した。津久井やまゆり園は県内の福祉関係者には研修先として親しみがあり、地域との交流も盛んな施設だ。入所者は環境の変化に弱い。他施設への移動は容易ではないだろう。事件後、市内ではさほど大きな動揺はみられないが、容疑者の措置入院歴、重度障害者に対する差別的発言が報道され、精神障害者への偏見が進むのではと心配している。本市の民生・児童委員は定数916人、市内22地区で活動しているが、8月3日の地区会長会で、今後も揺らぐことなく自信と誇りをもって主体的に日常の地域福祉活動に取り組むことを確認した。

#### 時計の針を戻すな 東京大准教授 熊谷晋一郎

今回の事件を受け、自分たちが今までやってきたことは何だったのかと無力感に襲われた。私は障害は本人ではなく社会の側にあると思うようになって生き延びてこられたが、犯罪を医療で対応しようとする動向には、時計の針が数十年前に巻き戻されるようなめまいを感じる。事件の真相解明には時間をかけるべきだが、事件の影響はものすごいスピードで起きている。今回の事件の加害者、あるいは被害者に自分を重ねる障害者が少なからずいる。障害種別を超えた連帯があったはずだが、今回の事件はそれをむしろ壊した。そこで追悼集会を企画した。国内外から寄せられたメッセージを私の研究室ホームページ (<http://touken.org/>) で公開する。ぜひ、多くの人と思いを分かち合いたい。

### 19人 夢見て生きてきた 相模原殺傷事件 さいたまの車いす女性が歌

東京新聞 2016年8月23日

相模原の障害者施設殺傷事件を受け、さいたま市の障害者の女性が知人と二人で、犠牲者十九人をしのぶ歌を作った。「19の軌跡（きせき）」と題し「いつまでも決して消える

ことない 僕らの軌跡 (あしあと)」「忘れちゃいけない」と思いを歌う。動画投稿サイト「ユーチューブ」にアップしたほか、三十日には埼玉県熊谷市でのイベントで披露する。

「19の軌跡」をレコーディングする見形信子さん。左は新島茂男さん=さいたま市で



歌を作ったのは、難病の脊髄性筋萎縮症のため車いすで暮らす見形 (みかた) 信子さん (47) と、一緒にバンド活動続ける中学教諭新島 (にいじま) 茂男さん (57) =埼玉県川越市。見形さんは、カウンセリングなどを通じて障害者の自立を支援するNPO法人の仕事に携わっている。見形さんらは事件後の八月上旬、現場の「津久井やまゆり園」へ献花に行くのを機に「自分たちにできることをしよう」と思い立ち、歌を作ろうと決めた。主に見形さんが作詞を、新島さんが作曲を担当した。

報道で、逮捕された元職員植松聖 (さとし) 容疑者 (26) による「ずっと車いすに縛られていることが幸せなのか」「障害者なんていなくなってしまう」といった発言を目にした。インターネット上では同容疑者の考えを支持するような書き込みもあり、これらへの反論も歌詞には込められている。

「ちゃんと夢だって見ていたよ 風や空や海だって感じる事ができたのに 僕らをどうして不幸せと、勝手に決めるのか？」

歌は、熊谷市の八木橋百貨店で二十五～三十日に開かれる障害者支援イベントの最終日、ライブで披露する。見形さんは「障害者も介助者のサポートがあれば自立して豊かな人生を送れる。堂々と生きていきたい」と話している。

## 「19の軌跡」

僕らはちゃんと生きてきたよ  
ちゃんと夢だって見ていたよ  
風や空や海だって感じる事ができたのに  
僕らをどうして不幸せと、勝手に決めるのか？  
僕らの軌跡消さないでよ 19のかがやき  
19の強さ みつめてよ

僕らのそばにはやまゆりが  
いつもそよそよ揺れていたよ  
気高さあrawす花のように僕らの誇りもそこにある  
僕らの人生はかけがえないと、みんな気付いてよ  
僕らの軌跡消さないでよ 19の気高さ  
19の強さ 讃えてよ

僕らはきっと礎になる こんな過ち 繰り返さないで  
怒りも くやしき 悲しみも 僕らが残した軌跡だから  
僕らがなんにもできないなんて なんて決めるのさ？  
僕らの軌跡消さないでよ 19の心  
19の強さ 感じてよ  
いつまでも決して消えることない 僕らの軌跡  
19の軌跡 忘れちゃいけない

「夜に不審者」冷静対応 音更 介護施設で防犯訓練 北海道新聞 2016年8月22日  
防犯訓練で、不審者(両端)の侵入を防ごうとする職員



【音更】町内の「介護老人保健施設とかち」は17日、不審者から利用者や職員の身を守るための防犯訓練を初めて行った。7月に相模原市の障害者施設で19人が刺殺された事件があったことから、参加した職員約30人は気を引き締めて訓練に臨んだ。

施設の防犯体制強化の一環で、帯広署生活安全課の署員が犯人役を務めた。昼間の強盗と、勤務する職員数が

少ない夜間の不審者侵入を想定し、対応を訓練した。

不審者への対応では、「知人がいる」と言いながら入居者の元へ行こうとする2人組の前に、職員2人が立ちふさがった。不審者は刃物を取り出したが、職員は刺激しないように対応した。署員は「侵入を防ぐ一方で、通報手段を決めておくことも大事。通報では犯人の特徴や逃走手段を知らせてほしい。防犯機材の備えも必要」と総括した。

同施設安全管理室の高橋雄士さん（41）は「高齢者施設でも不審者が侵入する可能性がある。今後マニュアルも作り、防犯の強化に努めたい」と話した。（折田智之）

## 滋賀) 子どもの居場所づくり 各団体が津市長に報告 朝日新聞 2016年8月23日 越直美市長(左)に活動を報告する各団体の代表ら=大津市観音寺の幸重社会福祉士事務所



貧困家庭の子どもやひきこもりの若者の居場所づくりを進めている大津市内の福祉関係者が22日、同市内の社会福祉士事務所越直美市長に活動を報告した。

参加したのは、NPO法人CASN（カズン）やボランティア団体Atlas（アトラス）など8団体。地域の人が食を通じて子どもの居場所づくりに取り組む「子ども食堂」や、生活保護世帯などの子どもに夜の居場所を提供する「トワイ

ライトステイ」などの活動を報告。越市長から「子どもたちにはどのような変化があるか」と質問され、「暴言を吐いていた子どもが、関わっていくうちに『ありがとう』と言えるようになった」などと説明した。

子ども家庭福祉を専門とする幸重社会福祉士事務所（大津市観音寺）の幸重忠孝さんは「行政に関わってもらい、活動をしっかり継続していきたい」と連携の必要性を訴えた。越市長は取材に対し、「行政として支援の方法はいろいろある。できることを検討していきたい」と話した。（奥令）

## 子どもの高次脳機能障害の症状など 都がリーフレット作成

東京新聞 2016年8月23日

### ◆症状や相談先まとめ 都がリーフレット

子どもの高次脳機能障害の症状や相談先をまとめたリーフレットを、都が初めて作った。この障害は、頭の病気やけがの後遺症により記憶や注意力などに支障が出る。作成に携わった、この障害がある子を持つ女性は「病気や事故の後に子どもが変わってしまった、と気になる場合は手に取ってほしい」と呼び掛けている。

数分前に言ったことを忘れる、授業に集中できない、疲れやすい、いつもあくびをしている、すぐに怒る…。子どもの高次脳機能障害で出やすい症状だ。

急性脳症や脳腫瘍などの病気、交通事故や転落によるけがで脳が損傷を受け、脳機能の一部に障害が起きるのが原因とされる。子どもの場合、先天的な脳機能障害が原因とされる発達障害と思われる、性格や発育上の問題などとされたりして、本人や家族が気づかない場合もある。

子どもの高次脳機能障害について都が作成したリーフレット

リーフレットはA3判三つ折り。北区の大学四



年生中村日向子（ひなこ）さん（22）が、この障害がある弟らをモデルに描いたイラストを掲載。チェックリストを付けるなどして症状を分かりやすく説明し、相談機関も載せた。

区市町村の福祉課や保健所、児童相談所などで配布している。問い合わせは都心身障害者福祉センター＝電03（3235）2956＝へ。（奥野斐）

## ベーシックインカムは有り？ 世界の現場から考える 松浦新 青山直篤

朝日新聞 2016年8月22日

豊かな先進国になぜ貧困があるのか。どうすればなくせるのか。そんな根源的な問いに答えようとする「ベーシック・インカム」が注目を集めています。あらゆる人にお金を配る——。その発想の可能性と課題を、カナダ、韓国、スイスの現場から探りました。

カナダ西岸のバンクーバー。中心部に最貧困地域のダウンタウン・イーストサイドがある。福祉国家カナダの別の顔だ。ホームレスも目立つ。「たくさんの人が薬物依存で苦しみ、心も病んでいる。僕は幸い、貧乏なだけだけど」。拾った日用品などを売って暮らしの足しにしているデビッド・バンデルミー



<b>ベーシックインカム</b> あらゆる市民に給付。差別につながらない 	<b>生活保護</b> 貧困層に絞って給付。受給者の自尊心を傷つけやすく、差別につながることも 
<b>原則的な性格</b> 	<b>雇用との関係</b> 「働ける者は働く」が前提 
<b>雇用状況と無関係に給付</b> 	<b>資力調査</b> なし 
<b>可実現性</b> 難しい。既存の社会保障の大幅な組み替えが必要 <b>財政面の影響</b> 賛成派は「社会保障の整理で、原資となるお金を捻出できる」と主張。野放図なバラマキや、福祉削減の口実になる可能性も	<b>現に実施。資格があるのに受けていない人も</b> 貧困層に絞って給付でき、社会保障費の伸びに一定の歯止め

リンさん（56）は言う。カナダ・バンクーバーの最貧困地域、ダウンタウン・イーストサイド。豊かな福祉国家、カナダでも貧困は消えない

アン・リビングストンさん（61）はこうした住民を公園に集め、ルールの下で運営する



青空市の世話人を務めてきた。ボランティアの自治活動だ。「役所は、私がボランティアをやっているのが気に入らないの」

リビングストンさんは生活保護を受けているからだ。子ども4人を育てたシングルマザーで、行政が提供するアパートに暮らす。長男は障害があって働けないが、手当を



受けて同じ建物で一人暮らし。残る3人のうち2人は独立し、リビングストーンさんは「働ける」と認定されたのだ。

行政側は昨冬、「就労計画を履行せず」として生活保護を打ち切った。リビングストーンさんは不服を申し立て撤回させたが、いつとめられるかわからない。

#### 小児医療の電話相談強化へ 厚労省、情報集約し改善 共同通信 2016年8月23日

厚生労働省が、子どもの病気やけがに関する医療相談を受け付けている「小児救急電話相談事業」を通じて集めた情報について、一元的に集約するデータセンターを設置する方向で検討していることが22日、分かった。相談内容を検証して事業を改善し、対応の強化を図る狙い。

小児医療を巡っては、過酷な勤務環境などを背景とする医師不足が指摘されている。子どもの症状が軽いのに、保護者が安易に夜間救急外来を利用する「コンビニ受診」も問題視されており、事前の相談体制を充実させることで、小児科医の労働環境の改善や医療サービスの向上につながると期待できそうだ。

#### 社説：障害者の転落死 危ない時は声掛けよう 北海道新聞 2016年8月23日

東京都港区の地下鉄・銀座線で、盲導犬を連れた視覚障害の会社員男性が、ホームから転落し、電車にはねられて亡くなった事故が波紋を広げている。

男性は今年3月に道内から東京に転居し、現場は勤務先の最寄り駅だった。

視覚障害者団体などが独自に事故原因を調べている。

事故から1週間。痛ましい悲劇を繰り返さぬため、社会としてもしっかり検証したい。

事故が起きた青山一丁目駅はホーム幅が3メートルしかなく、線路際から1メートル付近に敷かれた点字ブロック上には柱があった。健常者でも不安を感じる構造だった。

男性は、右手で犬につながるハーネスを持ち、点字ブロックを越えたため、駅員がマイクで注意を呼びかけたが、間に合わず、向かって左側の線路に落ちた。

前方に柱があり、犬がそれを避けようとして男性が線路側にはみ出したのか、向かいのホームの音で電車が到着したと勘違いした可能性も指摘されている。

訓練された盲導犬を連れていても、こうした事故が起こりうると受け止めるべきだろう。

障害者団体の調査では、目の不自由な人の4割近くが駅ホームからの転落を経験している。点字ブロックだけでは十分な対策になっていないと受けとめるべきだ。

求められるのは、可動式ホーム柵「ホームドア」の拡充だ。

国土交通省によると、ホームドアの設置駅は年々増え、今年3月末段階で全国の鉄道駅665駅で設置されている。しかし、普及率は全駅の7%にすぎない。

利用客が少ない駅への設置は予算的にも現実的でないが、利用客が多く、構造的に可能な駅は設置を急いでほしい。

現場駅は乗り換え客も多く、事故は夕方の帰宅ラッシュ時に起きた。周囲には少なからぬ人がいたとみられる。そんな中で事故は起きた。

身の回りでも、似たような光景を目にすることは少なくない。

たとえば、駅の階段などで、上り下りに難渋している高齢者や障害者に手をさしのべることにためらうことはないだろうか。

困っている人が居ても、おせっかいと思われやしないかと躊躇（ちゅうちよ）する。そんな空気が事故を止められなかったとしたら残念だ。

盲導犬を連れていたり、白いつえを持った人が危ない場面にいたら、小さな勇気を出して声を掛けよう。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

